

### <前回の復習と補足>

前回は「§2 言語が意味を持つとはどういうことか?」について説明しました。まず、真理条件意味論と主張可能性意味論に批判的に言及した後で、最も有望だと思われるのが「意味の使用説」だと述べました。意味の使用説では、言語表現の使用の規則が、その意味であると考えます。しかし、これに対していくつかの難問があることを説明しました。

「規約主義のパラドクス」（基礎の適用の規則の適用の規則のという無限背進）

「規則遵守問題」（規則を完全に明示することができないので、常に他の解釈の可能性が残るとい問題）

などでした。これに対する解決案としては、次のような提案があります(係争中です)。

・「規則」は「生活形式」であり、生活の岩盤であり、それ以上掘ることはできない。(ウィトゲンシュタイン)

・どのような規則理解が正しいかを決定する客観的な尺度はなく、**言語共同体による社会的サンクション**によって決定するしかない。(クリプキ)

使用説は、このような難問を抱えていますが、これらの難問は、使用説にかぎらず、真理条件意味論や主張可能性意味論を含めて、すべての哲学的な意味論が答えなければならない問題です。

### \*推論的意味論

使用説の積極的な議論としては、**ロバート・ブランダム**の「推論的意味論」が重要です。その基本的なアイデアは、次のようなものです。

「人が自らコミットしている概念的内容を理解することは、一種の実践的な熟練である。それは、主張から何が導かれ何が導かれぬか、あるいは、何がその主張を支持する証拠で何がそれに反する証拠なのか、等々を判別できるということに存する」(ブランダム『推論主義序説』斎藤浩文訳、春秋社、p. 27)。

これは、「ノウハウ(know-how)」として考えられている。推論は、言語表現が暗黙的に持つこのような関係を明示化する。逆に言うと**文の意味とは、このような推論的役割である**。文pの意味とは、pの上流推論(pを結論とする推論、 $r, s \vdash p$ のような推論)とpの下流推論(pを前提とする推論、 $p, r \vdash s$ のような推論)によって示される。

### § 3 クワインによる分析／総合の区別への批判

#### 1 カントによる分析判断／総合判断の区別とアプリアリな判断／アポステリオリな判断の区別

カントによれば、

分析判断＝主語概念に述語概念が含まれている判断

「三角形は、3つの角をもつ」「金は黄色である」

総合判断＝主語概念に述語概念が含まれていない判断

「 $5 + 7 = 12$ 」「この皿は、丸い」

アプリアリな判断＝経験によらずに真であると認識できる判断

アポステリオリな判断＝経験によって真であると認識できる判断

	a priori	a posteriori (empirical)
analytic	○論理学の命題	×無
synthetic	◎ 数学（算術、幾何学）の命題 物理学の中の基礎的命題	○通常の経験的命題

カントの『純粋理性批判』は、「アプリアリで総合的な判断はいかにして可能か」という問いに答えようとしたものです。言い換えると、自然科学を基礎づけようとしたものです。

#### 2 クワインによる分析／総合の区別への批判

クワイン論文「経験主義の二つのドグマ」(Two Dogmas of Empiricism) (クワイン『論理的観点から』飯田隆訳、岩波書店、1992. からの引用、①⑬などは段落番号)

この論文全体は、6節からなっている。

- 1 分析性の背景 Background of Analyticity
- 2 定義 Definition
- 3 交換可能性 Interchangeability
- 4 意味論規則 Semantical Rules
- 5 検証理論と還元主義 The Verification Theory and Reductionism (二つのドグマの関係)
- 6 ドグマのない経験主義 Empiricism without the Dogmas (二つの結果)

冒頭のパラグラフ

①現代の経験主義empiricism」の次の二つのドグマには根拠がない。

第一のドグマ「分析的な (analytic) 真理、すなわち事実問題とは無関係に意味に基づく真理と、総合的な (synthetic) 真理、すなわち事実に基づく真理との間に、ある根本的分裂があるという信念」

第二のドグマ「還元主義reductionism」すなわち「有意味な言明はどれも、直接的経験を指示する名辞からの論理的構成物と同値であるという信念」

#これらのドグマを捨て去ること結果

第一の結果「思弁的形而上学と自然科学とのあいだにあると考えられてきた境界がぼやけてくること」

第二の結果「プラグマティズムpragmatismへの方向転換」 (邦訳31)

{入江のコメント：クワイン以後の議論

第3のドグマ：概念枠組みと内容の区別 (デイヴィドソン)

第4のドグマ：事実と価値の二分法 (パトナム)

第一のドグマは、つぎのようなドグマ「形式的推論と実質的推論の区別」「主語述語文と同一性文の区別」「理性の私的使用と公的使用の区別」への批判にも関わらう。}

## 1 分析性の背景

分析的言明の第一のクラス：「論理的に真である言明」

「結婚していない男は、だれも結婚していない」

No unmarried man is married.

分析的言明の第二のクラス：同義語(synonym)を代入することによって、論理的真理に変えられる言明

「独身男はだれも結婚していない」

No bachelor is married.

## 2 定義

⑬「第二クラスの分析的言明」を、定義によって「第一のクラスの分析的言明、つまり論理的真理」に還元できるだろうか？

「独身男」は「結婚していない男」と定義されるというのである。(37)

しかし、定義は、辞書編纂者の、観察による報告である。つまり経験的命題であり、分析的なものではない。

「新しい記法を規約によって明示的に導入するという極端な場合」については、「4 意味論的規則」で論じられる。

### 3 交換可能性

次の提案は、「同義性」を「真理値を変えないことなき交換可能性」<sup>42</sup>と考えることである。

ところで、問題の「同義性」は「心理的連想や詩的特質における完全な同一性という意味での同義性」ではなく、「認知的同義性(cognitive synonymy)」である。<sup>43</sup>

ところで、「独身男」と「結婚していない男」は、確かに「真理値を変えないことなき交換可能性」をもつが、しかし、「心臓をもつ動物」と「腎臓をもつ動物」も「真理値を変えないことなき交換可能性」をもつ。

ところで、クワインは、「心臓を持つ動物」と「腎臓を持つ動物」は「真理値を変えないことなき交換可能性」をもつが、それは偶然的であるにすぎないという。それに対して、「独身男」と「結婚していない男」の「交換可能性」は必然的であり、それが真であることを知るために経験を必要としない。

この二つは、次のように区別される。

- ・心臓を持つ動物のすべて、かつ、心臓を持つ動物だけが、腎臓を持つ動物である。

- ・必然的に、独身男のすべて、かつ、独身男だけが結婚していない男である。

ここでの「必然的な交換可能性」を説明するには、「必然性」を説明することが必要であるが、「必然性」については「分析性」概念に頼らないでは、うまく説明できないので、同義性の説明はうまくできない。

分析性←同義性←交換可能性←必然性←分析性、というように説明が循環してしまう。

{その後、クリプキによる「様相論理学」に対する意味論が与えられ、完全性証明が行われたので、それによって、「必然性」と「可能性」について適切に語るができるようになる。しかし、クワインはその「様相論理学」に批判的であったので、これらの語彙を使用することに懐疑的であった。これについては、現在も係争中です。)

### 4 意味論規則 Semantical Rules

③⑦ 「日常言語において分析的言明を総合的言明から区別することがむずかしいのは、日常言語が曖昧であることからくる」ので、明示的な「意味論的規則」を備えた人工言語で、この区別を明確にできるのではないだろうか。<sup>49</sup>

つまり、「ある言明が分析的であるのは、それが（単に真であるだけでなく）意味論的規則によって真であるときである。」<sup>52</sup>と定義できるのではないか。

③⑨ 「言明 S が言語 L<sub>0</sub> において分析的であるのは、・・・」という仕方ではじまる

規則を我々が理解できるためには、我々は、それ以前に、一般的関係名辞「において分析的」を理解しているのではなくてはならない」50

しかし、「どの言明が $L_0$ において分析的であるか」をいうことによって説明されるのは「 $L_0$ において分析的」であって、一般的な「分析的」や「において分析的」ではない。51

私たちは、特定言語 $L_0$ の「意味論的規則」を示すことはできるが、言語一般にあてはまる「意味論的規則」を示すことはできない。そして、特定言語 $L_0$ の「意味論的規則」が何であるかは、経験によって知られることである。ゆえに、意味論的規則の定義によって、分析的真理と総合的真理を区別することはできない。

## 5 検証理論と還元主義（第二のドグマ）

この論文での最後の試みが、「検証理論」による言明の同義性の説明である。

「検証理論」によれば、「二つの言明が同義であるのは、それらが経験的な確証(confirmation)あるいは反証(infirmation)に関して同様であるとき、かつ、そのときに限られる」56

「検証理論」によれば、分析的言明とは、「事実上何が起ころうとも確証されるといった極限的な種類の言明」(61)であることになる。

カルナップの論理実証主義による「検証理論」は、科学理論の正しさを、論理法則の正しさと観察言明の正しさに還元できるという「還元主義」のドグマに基づいている。

しかし、このような「還元主義」は、論理的言明であれ、理論言明であれ、観察言明であれ、「それぞれの言明が、その仲間の諸言明から切り離してとらえられとき、とにかく確証ないしは反証が可能である、という考え」を前提している。

「私の反対提案は、本質的には、『世界の論理的構築』における物理世界についてのカルナップの説に由来するものであるが、次のものである。外的世界についてのわれわれの言明は、個々独立にではなく、一つの団体(a corporate body)として、感覚的経験の裁きに直面するのである。」(61)

「還元主義のドグマは、… もうひとつのドグマ——分析的言明と総合的言明との間には、分裂があるというドグマ——と密接に関連している。」(61)

「私のここでの提案は、個々の言明の真理性における言語的要因と事実的要因につい

て語ることが、それ自体ナンセンスであり、他の多くのナンセンスの源でもあるということである。科学は、全体としてみられたとき、言語と経験の両方に依存している。だが、この二元性は、個々別々に考えられた科学的言明においては有意味な仕方では見出せないものなのである。」62

「経験的有意性の単位は、科学の全体なのである。」63

## 6 ドグマのない経験主義（経験主義の二つのドグマの批判から帰結する二つの結果）

### 意味の全体論

68「地理や歴史のごくありふれた事柄から、原子物理学、さらには純粋数学や論理学に属するきわめて深遠な法則にいたるまで、われわれのいわゆる知識や信念の総体は、周縁に添ってのみ経験と接触する人工の構築物である。あるいは、別の比喩を用いれば、科学全体は、その境界条件が経験であるような力の場のようなものである。周縁部での経験との衝突は、場の内部での再調整を引き起こす。いくつかの言明に対して真理値が再配分されねばならない。…だが、場全体は、その境界条件、すなわち経験によっては、きわめて不十分にしか決定されないので、対立する経験が一つでも生じたときに、どの言明を再評価すべきかについては広い選択の幅がある。どんな特定の経験も、場の内部の特定の言明と結び付けられているということはない。特定の経験は、場全体の均衡についての考慮を介して、間接的な仕方でのみ、特定の言明と結びつくのである。」63

69「もしこうした見解が正しければ、個別の言明の経験的内容について語るのは誤りのもとである。とりわけ、それが、場のなかで経験にちかい周縁からはるかに離れている言明であるならば、なおさらである。なおその上に、経験に依存して成り立つ総合的言明と、何が起ころうとも成り立つ分析的言明との間の境界を探し求めることは、愚かなこととなる。」

「逆に、まったく同じ理由から、どのような言明も改訂に対して免疫があるわけではない。排中立と言う論理法則の改訂でさえ、量子力学を単純化する一手段として提案されている。」64

### 第一の結果：思弁的形而上学と自然科学を分けられない

71「私自身は、素人の物理学者として、物理的対象の存在を信じ、ホメーロスの神々の存在を信じない。…しかし、認識論的身分の点では、物理的対象と神々のあいだには程度の差があるだけであって、両者は種類を異にするのではない。」66

### 第二の結果：プラグマティズム

72「カルナップやルイスやその他の人々は、様々な言語形式や科学の枠組のあいだで

の選択の問題について、プラグマティックな立場をとっている。しかし、かれらのプラグマティズムは、分析的と総合的との間にあると想定された境界のところで終わりを告げる。こうした境界を拒むことで、私はより徹底したプラグマティズムを支持する。[···]持続する感覚的刺激に合うように科学的遺産に変形を加える際に指針となる考慮は、合理的たらんとする限り、プラグマティックなものなのである。」(69)

=====

### ミニレポート課題

- 1、分析的に真な文と総合的に真な文の例を書いて下さい。
- 2、分析的真理と総合的真理の区別に基づいて成り立っていると思われる区別を書いて下さい。
- 3、クワインの分析／総合の区別への批判のどの点が、わかりにくかったですか？どの点が怪しいと思いますか？
- 4、今日の講義内容に関連する、哲学的な問いを立ててください。

=====